

## 書体デザインの立場から

弊社は書体デザインを伴うフォントの開発販売しております。書体デザインの立場から最近の全角に対する議論に対して違和感を感じる場合があります。

書体をデザインする際に、デザイナーはその使用場面を意識します。逆に、使用場面を考え、それがデザインの基になることもあります。つまり、使用場面は書体デザインの観点の重要な要素です。使用場面の一つは、ドキュメントの種類や文章の内容などの、使用される状況のことで、人は文字を最初に画像として捉え、それを記号に変換していると考えられます。つまり、書体には記号を示す機能と、画像と同じように何らかの印象を与える機能を持っています。そこで文字列に適切な書体を合わせることで、文字列そのものに印象を与えることができます。

# あんどっぷり宇治金時 浪漫喫茶

図1. パルラムネとパルレトロン

図1の文字列はデザイナーが書体に合わせると良いと考えているものです。

次の使用場面は、見出しや本文などの、レイアウトにおける要素です。一般的な明朝体、角ゴシック体をデザインする場合、見出しで使用されるのか本文で使用されるのかを想定します。例えば、太いウェイトの書体は見出しで使用される可能性が高いと考えます。

### 見出し

本文本文本文本文本文本文本文本文本文本文本文本文本文本文本文本文  
本文本文本文本文本文本文本文本文本文本文本文本文本文本文本文本文

図2. 筑紫A見出ミン-Eと筑紫明朝-R

図2の見出しに使用されている書体は弊社の筑紫A見出ミンですが、名前の通り、見出しで使用されることを想定して開発されたものです。つまり、見出しで使用される、あるいは本文で使用されることを意識してデザインする場合があります。

では、どのように書体デザインを行うかを簡単に説明します。書体のデザインにあたって、仮想ボディを設定します。ベースラインに対して、一辺が1000<sup>1</sup>の大きさの仮想ボディをベースラインより上の高さが880になるように配置します。このボディに対して、いくつかの字面のガイドラインなどを設定した後、文字をデザインしていきます。

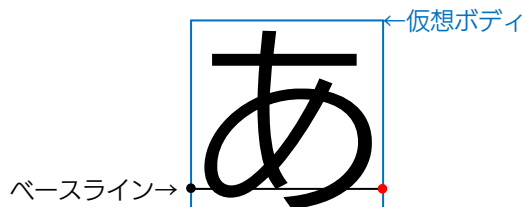


図3. デザインされた「あ」

かな、カナ、漢字などの“全角文字”は仮想ボディの中に基本的にデザインします。文字そのもののデザインと共に字幅も設定します。字幅は文字と次の文字の間を定める値です。図3では黒丸がアウトラインの原点になり、赤丸が次の文字の原点になります。この距離が字幅になります。逆にフォントエンジンは字幅を使って、ベースラインに沿って文字を並べます。

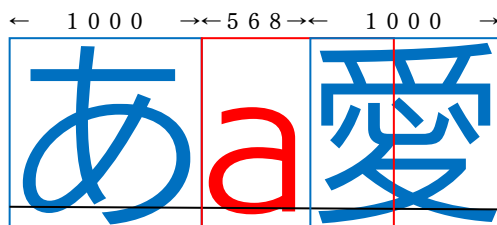


図4. 文字列

“全角文字”の字幅は、仮想ボディのサイズと同じ1000にします。半角文字は500のサイズ、ラテン文字（プロポーションアル欧文）は字形に合わせて字幅を設定します。設定した字幅の他に“全角文字”をプロポーションアルにする `palet` 値やカーニング値も必要に応じて設定します。

日本語書体のデザインでは“全角文字”以外にラテン文字もデザインします。その際には仮想ボディの外にはみ出してしまう文字が現れます。

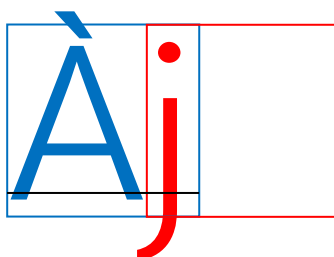


図5. 仮想ボディの外側にはみ出る文字

“j”の下部が仮想ボディの下側にはみ出してしまうのは、ベースラインが仮想ボディのかなり下側に設定されているためです。ベースラインを上にあげると、“A”などの多くのラテン文字が“全角文字”に対して、上にあるように見えますし、“j”だけを上にあげると、他のラテン文字に比べて上にあるように見えるためです。

<sup>1</sup> 仮想ボディのサイズは必ずしも1000でなくても良い

アプリケーションがフォントファイルに記述されているデータを使用して、字を並べるのとは違って、行の間隔は主としてアプリケーションが決定します。行間はアプリケーションの機能と直結します。レイアウトを重視するアプリケーションでは、文字のサイズと行間が対応するのではなく、文字のサイズの範囲と行間が対応する場合があります。また、レイアウトを固定するのであれば、文字サイズをいくら大きくしても行間に変更されません。逆に、文字サイズを変更すると、直ぐに行間を変更するアプリケーションもあります。つまり、文字のレイアウトはフォントの機能とアプリケーションの機能によって実現されるものです。

デザイナーは書体をデザインする時に、使用場面を意識します。その一つは字面に影響を与えます。字面は文字の最小内接矩形です。その矩形の形と大きさを意識します。極端な話をすると、長体、平体などの書体です。長体は横書きにおいて、一行に含まれる文字数を多くしたい場合に使用されます。平体は縦書きです。新聞などで使用されます。これらは極端な使用場面を目的としてデザインされます。そうでなくても、本文で使用されることを想定する書体であれば、字面の形が文字毎に極端に違うようなデザインは避けるでしょう。そのようなデザインは読むリズムを壊すことがあるからです。しかし、見出しで使用されることを想定する書体であれば、単語になった時にどう見えるかを考えてデザインします。

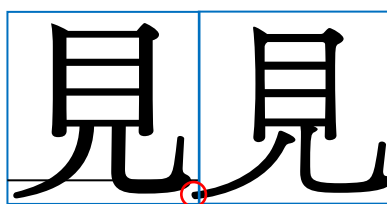


図6. UD明朝と筑紫Q明朝

その場合には仮想ボディからはみ出すことも厭わなくなります。ほとんどの書体でそういうことはありませんが、その対象が“全角文字”にまで及ぶ可能性もあります。

もう一つは字面の大きさです。字面の大きさは可読性に影響を与えます。

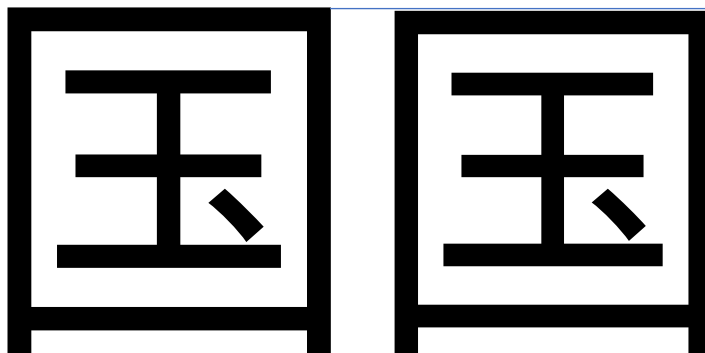


図7. UD角ゴ\_ラージとスモール

図7に示す書体は左側がUD角ゴ\_ラージ-R、右側がUD角ゴ\_スモール-Rです。同じファミリー書体ですが、右側の漢字は左側の漢字を98%にして作成しています。これにより、文字と次の文字の間隔が広がり、可読性が上がります。

このように書体のデザインでは使用場面を想定し、デザインを考えることがあります。それは、字面の形、大きさなども含まれます。この場では、全角や半角という考え方において、使用するフォントの文字もその考えにそってデザインされていることが前提になっているように私には聞こえています。それが違和感です。その考え方は、印刷の進化の過程で生まれたものであり、その中で生まれた様式美のはずです。それは正しいのかもしれませんが、考え方の一つでしかないように思えます。実際、弊社のデザイナーは仮想ボディにとらわれることのないデザインを行なう場合があると聞きます。それも一つの考え方なのだと弊社では考えています。

以上